



生活やものづくりの学びNetニュース

第12号
2016年7月発行

巻頭言 技術科教育の「ものづくり」とは…

京都教育大学名誉教授 安東 茂樹

私は、京都教育大学を本年3月に定年退職した。大学卒業からこれまで、中学校と大学で21年間ずつ計42年間の教職生活を送ってきた。その間、技術科教員としてもものづくりに関わる仕事に従事し、私の人生は“すべてものづくりに通じる”と言える。「ものづくり」という言葉は、げんので釘を打つような行為や技能をさす場合もあれば、構造物のような大きな建物やシステム及びコンピュータソフトなど結果としての対象物をさす場合もあり、広範な意味付けで用いられる。

遠い昔から、人間は、頭の中で考えたことを、手足や体を器用に動かして、いろいろなものとして形にしてきた。そして、群れを好み集団を構成し、個々に知恵を寄せ合ってもものをつくることを営みとして日常的にやってきた。その営みの成果や発展の結果として、社会や文化が形成されてきた。すなわち、「ものづくり」は、人間そのものの生き方の証であって人間社会において重要で必要不可欠な存在である。そして、人間社会が発展してきたその経緯は、道具を持ったものづくりを通して、目的とする構造物や器物を作り上げ、日常生活や社会生活を豊かにし潤いのある暮らしをもたらすとともに、生活を便利にしたり繰り返し改善したりして発展してきた。

これからも、この小さい島国において、社会や経済及び産業が発展を続けていくためには、何が求められるかを考える必要がある。それは、日本人が備えている勤勉性、巧緻性、正確性などの特長を生かした信頼性の高い「ものづくり」を行う製造業の拡充とともに、工夫創造する智恵（知的財産）、不況や突発的な問題などへの対応（トラブルシューティング）、方向性を決定する場面で最適解を求めるトレードオフ（複数の要素が互いに相反する利害を伴い、どれかのメリットを選択することによって別のデメリットやリスクが発生するような事柄）などの優れた能力を発揮することである。したがっ

て、国民一人一人が素養として備えたい「基礎的なものづくり学習」を実践する技術科教育のものづくりが重要になる。

技術教室の中で、木材や金属の材料で「ラック」や「メモホルダ」等をつくっている時、どの生徒も深く考えて工夫し、いろいろ試しながら仲間と共に夢中になって生き活きと学んでいる。その学びの姿は純粹で素直なまなざしをしていて、友だち同士で協働して学ぶ喜びや生きる自信さえも何うことができ、生徒の自己肯定感の高まりが見られる。これらのことから、「ものづくり」とは、人間形成と共に生徒の成長に有益な存在と位置づけられる。

技術科教育の「ものづくり」とは、「げんので釘を打つ」「のこぎりで板を切る」「かんので板を削る」などの生活で活用する技能（スキル）を育むことである。この技能を育む「ものづくり」を軸として、産業で用いる技術、科学的な原理に基づく技術、伝統的で緻密さへのこだわりを大切に技術、最先端の技術などに関連した基礎的・基本的な学習内容や実践的な学習として、技術科教育の内容が設定されている。実際に、立派で見栄えのよい製作品をまた使用できる実用的な製作品をつくることを重視してきた。そのものづくりの学びから、つくる体験を通して「何が見えるか」、「何が変わったか」並びに「何を換えようとしているか」など、その認知的に転移可能な思考や判断を育むことを目指している。今後、技術科教育は、作品完成を目指した「ものづくり」を通して、生徒の「豊かな感性など五感を育てる」、「自分を客観視できる自己モニタ力や自己調整力を育てる」、「自分の存在としての自己肯定感を育てる」等を求めつつ重要な役割を担っていく。

生活やものづくり学びネットワーク実行委員会開催のお知らせ

総会に会わせて、今年度の実行委員会の開催をさせていただきます。年に1度の開催といたしますので、万障お繰り合わせの上、ご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

日時 2016年9月25日(日)12:00~13:00 場所 東京家政大学16号館2階162A講義室

- 議題
1. 各県の学習交流会の取り組みと計画
 2. ロビー活動について
 3. ニュースレター、メーリングリストでの情報交換の課題
 4. 実行委員会運営上の課題
 5. その他



生活やものづくりの学びネットワーク 春の学習交流会報告

日時・場所：2016年3月27日 13:30～15:30 大東文化会館

テーマ：ICTを活用した授業事例

講師：内田 康彦 氏（荒川区立諏訪台中学校）

栞原 智美 氏（東京学芸大学附属世田谷中学校）

春の学習交流会が大東文化会館で開催されました。テーマを「ICTを活用した授業事例」とし、中学校の技術科と家庭科、お二人の講師にご講演頂きました。

技術科の内田康彦先生の荒川区立諏訪台中学校は、文部科学省の研究指定校であり、荒川区の授業力向上プロジェクト研究指定校でもあるそうです。諏訪台中学校ではタブレット端末が生徒全員に配布され、そのタブレットを利用した授業が展開されており、ICTの先進校として研究発表が求められているとのことでした。内田先生はタブレット端末の導入による光と闇について紹介されました。

施設・設備面の面では、タブレット端末が一人一台配布されたので、情報室にあったパソコンが撤去されたことや、プリンターへの接続も限定的になったとのことでした。学校の無線LANの容量が小さいために、40人が一度にアクセスすることが出来ず、20人ずつに制限しないと速度が極端に遅くなったり接続しにくくなるなど、様々な問題が生じたそうです。タブレットの充電も教師が管理するが、一度に充電ができないということでした。教材用の良いソフトが使えてこそタブレットの強みだと思われそうですが、そうしたソフトはタブレットの場合、一台ずつ教師がインストールし、新しいソフトの場合は許可を取る必要もあるそうです。さらに、一時間の教材を作るのに半日から1日かけて作らざるを得ないなど、教師任せで教材作成支援などのサポートがほとんどないとのことでした。



内田 康彦氏

なお、修学旅行などでタブレットを使う場合、宿のWi-Fi環境は、学校と異なりアクセス制限がかかっていないので、困った問題が生じる可能性があるそうです。タブレット端末を学校教育、特に授業で使う場合、それに対応した設備や施設、支援やサポート体制（教材づくりやソフトの開発支援など）が不可欠だと思われます。また、優良な教材シリーズを開発するなどの後方支援も重要になるものと思われます。内田先生の発表から見てきたのは、タブレット端末を配っただけで、後は全て現場の教師任せという、ICT活用の現状が見えてきました。少なくとも充電やタブレットの管理については教師に任せるのではなく、教師に負担をかけ

ない方法で行われるべきと思われました。

家庭科の栞原智美先生は、家庭科の授業数が少なく実技の時間を確保するために、また生徒の図書館利用促進のためにICTの活用を考え、従来のカリキュラムに導入したということでした。

1年生では、リメイク作品の製作前に、先輩の文化祭での展示作品を見せるため、2年生では、弁当づくりの調理実習の撮影などでタブレットを利用してきただけです。特に情報共有や発表の場面において、授業で導入する利点がわかりました。



栞原 智美氏

3年生では「幼児のおもちゃ製作」をしており、製作した3歳児用おもちゃの「40秒PR CM」と遊び方の説明書を、タブレットを用いて作成するという報告がありました。タブレットは、教師用が1台、生徒用が10台あり、4人班で1台を使用してきましたが、2014年度にIT企業の授業支援に応募し、10台の貸し出しを受けることができたそうです。2014年度はpreziというプレゼンテーションソフトを、2015年度はloiloノートという動画編集もできるソフトを用いたという紹介があり、簡単に利用できたとのことでした。

3年生では、この「40秒PR CM」プレゼンテーションの映像をお互いに見ることによって、3歳児に適したおもちゃについて関心を持てる、自分の作品への理解を深め他への発信を意識できる、また他の人の映像を見ることによって他の人の考え方や意見がわかるなどの利点があったそうです。また、以前は時間がかかっていたプレゼンテーションが、1時間以内で可能となり、その入力作業なども3年生で慣れているためスムーズに運んだとのことでした。また学校図書館と協働し、おもちゃの製作に関する本を並べ、生徒の作品のまとめを展示したという報告がありました。

栞原先生は、授業の時間短縮を図るためにタブレットの導入をしましたが、さらに、生徒の学習活動が活発になり参加意欲が増すなどの生徒の様子や作品など、映像を交えながらの具体的なご報告は、大変興味深いものでした。

参加者からは、内田先生と栞原先生の両方の事例から、ICT導入のプラスとマイナスの面を考えることができた、ICT導入の利点や課題が考えられた、教員研修などの支援や教育ソフトの開発がさらに必要であるなどの意見が出されました。

文責：沼口博（大東文化大学）・神山久美（山梨大学）

2015年度各地区の活動報告

1. 青森県の活動報告

青森県支部は、今年度の交流会を1月7日（木）弘前大学で開催し、小学校5名・中学校6名・高等学校9名・大学教員2名が参加しました。

支部としての開催は初めてのため、会員と実施内容を打ち合わせた結果「小・中・高等学校の家庭科教育の現状を知る機会とする」こととしました。

参加者を3つのグループに分け、それぞれに各学校の教員が入り、それぞれの現状について報告および意見交換を行いました。各グループとも熱心な意見交換が行われ、予定していた2時間はアツと言う間に過ぎ、最後に各グループから話し合いの内容の報告を行い、情報共有を図りました。

アンケートには、参加者全員から「他校種はもちろん同じ校種でも普段話す機会が少ないため、他校種の様子がわかり、有意義で、貴重な時間だった」との感想を頂戴しました。また、小学校教員からは「中・高校の教員の話から、小学校で学んだこと、特に基礎的なことが定着していないことを実感した」との記載があり、これについては中・高等学校教員とも同様な記載がみられました。中学校教員からは「校種を越えて同じような『困っていること』を抱えていることがわかり、中学校ではどのように解決を図るかを考えることができた」、高等学校教員からは「出身中学校による差が大きいため、今回の交流会でいろいろ情報を得ることができた。これからの授業に役立てたい」などの感想がきかれた。さらに、「それぞれの様子や課題がわかり、そのために自分では何ができそうかを考える機会になった」「連携して取り組むことの大切さを再確認した」「次回はテーマを決めて実施してもよいのではないか」という積極的な意見もあり、引き続き交流会を開催することを約束し閉会しました。

今回の交流会は、事務局が当初予想していたより多くの参加者があったことに加え、校種を越えた企画が功を奏し、貴重な交流の場となりました。次年度以降も、参加者からの要望に応えるような企画を実施し、支部のネットワークを強化していきたいと考えています。 日景弥生（弘前大学）

2. 岩手県の活動報告

現在、日本は繊維製品の多くを輸入に頼っている。しかし、地場産品として様々な繊維製品が各地の産業として伝えられており、岩手県では「ホームスパン(home spun)」がその中のひとつといえる。「ホームスパン」とは「羊毛を染色して、手で紡いで手織りしたもの」のことを指す。盛岡市では「安心・安全なメイドイン盛岡」の地場産品を「盛岡特産品ブランド認証商品」として認証し、盛岡市のブランドイメージを高めるための戦略として取り組んでいるが、「ホームスパン」も盛岡ブランド認証商品である。

そこで、岩手県支部では「ホームスパン」の教材化を検討

するべく、まずは「ホームスパン」の理解を図るための講習会を開催することにした。なお、この講習会は「岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業」との共催である。講習会の開催要項は以下のとおりである。

日程：2015年9月19日（土）13：30～17：00、講師：植田紀子氏（ホームスパン作家、植田紀子織物工房主宰）

場所：植田紀子織物工房

講習内容は、簡易的に織物を学ぶことができる教材「Weaving on sticks（編み棒を使用した織物）」を植田氏からご紹介いただき、作品の製作（人形、プレスレット）等を実施した。参加者はネットワーク会員を含む8名である（小・中・高・大の家庭科教員）。

用具の簡便化の工夫として、織り機に縦糸を張るかわりに「さいばし」や「ストロー」を代替利用することが植田氏から提案された。講習で使用されたテキストでは編み棒が用いられていたが、市販の編み棒を学習する児童・生徒分揃えるには金銭的負担が大きい。その点、さいばし、ストローは編み棒に比べて廉価で、どこでも購入できるメリットがある。参加者の間で、実際に家庭科の授業で取り入れる際の工夫や課題についていろいろと検討することができ、大変有意義な講習会となった。 渡瀬典子（岩手大学）



ストローを用いた教材提案（植田紀子氏による）

3. 秋田県の活動報告

今年度の学習交流会は、10月17日（土）、18日（日）の両日、秋田市の貝の沢温泉で開催され、小学校・高等学校・大学教員8名が参加しました。

報告(1)では、川連小学校に勤務し、大学院教育学研究科2年次の菊地教子先生が、「小学校家庭科における生活実践力の向上一家庭科、生活科での授業実践を通して」と題して、研究の中間報告を行いました。また、報告(2)では、秋田北鷹高等学校小栗美香子先生による「平成27年度 JICA 東北教師海外研修（ルワンダ）報告」があり、ルワンダでの研修の感想を次のように話してくれました。

「7月25日から8月7日までルワンダでの研修に参加しました。食糧自給率に関する授業改善のヒントや虐殺からの復興について学びたいということが目的でした。短い研修

期間でしたが、現地で多くのことを学び、帰国後は、『水』と『コーヒー』をテーマにした授業を行うことができました。課題は多いのですが、今後もグローバルな視点で食生活や消費生活分野を授業出来るよう努力を重ねたいと思います。特に印象的だったのは次の2点です。①ルワンダは良質のコーヒーがとれることで有名な国ですが、植民地化されたときにドイツが強制的に栽培されたこともあってか、現地の人はコーヒーをあまり飲みません。一生懸命栽培しても家族がおなかいっぱいにならない作物なのだということ。②現地の人が巻くだけできているカラフルなアフリカ布「チテンジ」。今の流行は中国風（アジア風）の柄なのだそうです。どことなく日本的で、浴衣を作ったらステキと思われる布が多かったのが印象的だったことでした。」

参加者の一人、雄物川高等学校小松久子先生からは、「今回の研修会で、菊地先生の発表では、実践内容だけでなく、記述内容の分析に有効な『KH Coder』について教えていただき、授業でも活用できるかも？と構想が広がりました。また、小栗先生の報告では、自分自身の「知らないこと」の多さを痛感したというのが率直な感想です。「グローバル教育」を本当の意味で捉えて、家庭科で実践していきたいと思いました。」との感想を寄せて頂きました。

今回の学習交流会は、校種を越えた家庭科教員の貴重な学習や交流の場となり、充実した研修会を終えることができました。次年度以降も家庭科教員相互の研修の場を確保し、支部のネットワークを強化していきたいものと考えています。

秋田支部事務局 佐々木信子（秋田大学教育文化学部）



4. 山形県の活動報告

今年度は一般市民向け講座と家庭科教員対象の研修会を開催しました。

(1) 「おとなの家庭科」講座

12月3日（木）、一般市民対象の講座を山形県男女共同参画センター（チェリア）において山形県の男女共同参画推進グループとの共催で行ったもので、「チェリア・デ・カフェ」会員5名の参加を得ました。第1回のテーマは「バランスのよい食事って何？」で一日に必要な栄養素量を各種食品群（三食食品群、6つの基礎食品群、4つの食品群、食事バランスガイド）で確かめ、食品を実物やフードモデルで見て学ぶことができました。一日に必要な食品量を知ること、非常時の食事や災害に備えた備蓄食糧の見積もりにもいかすことができます。チェリア・デ・カフェの皆さんからは家庭科教科書

にも関心を持っていただいています。本講座は、「今の家庭科教育の内容は、大人も必要なことだから勉強したい。」という声を受けて開催されたものです。

(2) 家庭科教育研究会

3月27日（日）には、山形大学を会場に教員を対象とした研修会を開催しました。参加者は中学校教員6名、高校教員9名、大学教員2名、教員志望の大学生4名の計21名です。山形県で教員対象に行われる初めての企画でしたので、研修に先立ち、リーフレットを用いてネットワークの趣旨説明を行いました。研修内容は、前日に行われた「生活やものづくりの学びネット千葉」と日本家庭科教育学会セミナー（知識構成型ジグソー法の授業づくり）の参加報告の後、持ち寄ったものや業者から借用した視聴覚教材の試聴や日頃の授業に関する情報交換を行いました。家庭科の授業時間数の増加は見込めそうにない現状ですから、小・中・高の学習内容の連携・精選が一層求められます。今後も学校種を超えた合同の研修会を企画し、情報交換や親睦をはかりながらネットワークを広げていきたいと思います。また、本学を昨年卒業したばかりの新人教員と教員志望の学生との交流もできました。この研修会をきっかけに知り合った先生方が、新人教員のメンターとなって下さることも期待したいと思います。

石垣和恵（山形大学）



5. 福島県の活動報告

2015年度は大きく2種の活動を行った。1つ目は、2013年度から実施している子ども対象のワークショップ（調理実習）の開催である。今年度も小学校低・中学年を対象とし、家庭での実践化を図ること及び家庭科への関心を高めることを目的として2回実施した（2015.8.29 / 2015.11.14、講師：福島大学附属幼稚園養護教諭、於：駅前施設「こむこむ」）。

2回目は、地元でとれた旬の食材（キウイ）を利用したジャムとスコーン作りであったが、定員16名のところ107名もの応募があり、抽選で参加者を決定した。参加者の保護者からは、低学年対象の料理体験ワークショップは数少ないため、今後も開催してほしいとの要望があった。2016年度も開催できるように検討したい。

2つ目は、末松孝治氏（福島市私立高校家庭科教員）による、「人生で大切なことはすべて家庭科で学べる」の講演会開催である（2016.3.13、於：福島大学附属図書館）。当日は、教育関係者、一般、学生を含め県内外から50名近い参加者があった。末松氏自身の体験・経験をふまえた家庭科の授業例を

示していただいたが、多くの参加者にとって、普段の生活の見方や家庭科の教材の在り方を見直すきっかけとなった。

また、講演会の間、小学生（幼児含む）を預かり、「フェルトを使って、おつかいさいふを作ろう」のワークショップを実施した（於：大学講義室）。参加した子どもは、小学5・6年生以外、裁縫は未経験であったが、大学生に補助してもらいながら、自分だけの作品を製作した。参加者の保護者から、親子ともども貴重な時間を過ごせたとの感想があった。

一連の活動の様子は、ホームページに掲載している。
<http://smnfukushima.jimdo.com/> 福島県事務局 山岸朋子

6. 千葉県の活動報告

生活やものづくりの学びネットワーク千葉では、2016年3月26日（土）千葉大学にて、佐藤雅子先生（成田市立公津の杜小学校）による「味覚教育体験ワークショップー味覚教育を家庭科に取り入れてー」を開催した。参加者は小学校4名、中学校7名、高校6名、大学4名、退職教員2名（計23名）と幅広い校種の方々の参加を得た。

前半はまず「味わう人の身分証明書」で自分を見つめることから始まった。次に2つの色を見てそこから想像するもの、季節、食べ物・果物を各人が用紙に記入後、グループで内容を出し合った。同じものを見ても想像するものは人さまざまであった。さらに3つの風景写真を見る、異なる色コップの飲み物を飲んでみる、などのワークショップを楽しみながら行った。これらのさまざまな体験は主体的に自分の言葉で表現する力や自分・他者理解につながる。後半は五感を使った味覚教育をどのように家庭科の授業に取り入れ、活かすのか、食の領域の授業実践を中心に講義がなされた。また食だけではなく衣や住の学びに広げられることも提示していただいた。

参加者からは「味覚教育はどんな領域にもつながる基本かと思った。五感を磨く、今はバーチャルの世界で生きている子どもたちが多いので、人間が本来持っている感覚を研ぎ澄ますということが、安心、安全、身を守る力をつけていくのに本当に大切だと思わせてもらった」、「味覚教育という『食べる』ということが前提だと思っていたが、食べるだけではなく考える・見るなどもすべて含んでいるということがよくわかった」、「中学生になると評価を意識して大人の求める答えを出そうとする生徒が増えてしまい、なかなか自分で考え自由に表現することをしようとする生徒が少ない。そのため導入としてどのような授業を取り入れどのような発想をさせるとよいのか今日の講義で分かった」、「同じものをみても人それぞれで経験や体調の違いも含めて違うことを実感できた。それを受けとめることで普段発表できない子も自信をもって発表ができるようになることがわかった」などの感想があり、充実した学習会となった。 小谷教子（千葉県）

7. 東京都の活動報告

本実行委員会では、2015年度内に8回実行委員会を開催し、大きく分けて2種類の活動を実施した。

1 地域の小学生、中高生、子育て中の保護者対象の縫い物、

編み物講座の開催

2 会員相互の学習交流会の開催

学校教育の中で乏しくなっている生活やものづくりの学びの実践を地域の中で支援して、保護者等にその状況と学校教育の中での学びの充実を訴えるとともに、ものづくりの面白さや楽しさも伝えていくということを目的に、江戸川区の児童・生徒福祉施設で活動をした。どの回においても、事前に教授リハーサルを行い、午後の実際の講座に備えた。また、講師陣については江戸川区として、ボランティア保険に加入していただいている。詳細は以下に記載する。

A 2015（平成27）年度の活動報告

I 江戸川区の児童・生徒福祉施設で小学生、中高生、子育て中の保護者対象に縫い物、編み物講座の開催

1 小学生対象の中小岩小学校すくすくスクールでの活動

① 8月19日（水）12:00～16:30 ・内容ー縫い物としてバンダナを使った巾着袋の製作の指導 ・参加者ー小学1年～小学4年14名、保護者4名・当日講師ー東京実行委員3名、短大生4名、他1名 計8名

2 小学生対象の西小岩小学校すくすくスクールでの活動

① 8月21日（金）12:00～16:30・内容ー縫い物としてバンダナを使った巾着袋の製作の指導・参加者ー小学1年～小学6年 20名、保護者2名・当日講師ー東京実行委員4名、会員1名、短大生7名、他2名 計14名

② 12月28日（月）12:00～16:30・内容ー編み物として鉤針編みの基礎を教えりんごのマスコット製作の指導・参加者ー小学3年～小学4年10名・当日講師ー東京実行委員5名、会員3名 計8名

3 中高生、子育て中の保護者対象の共育プラザ小岩での活動

① 9月13日（火）12:00～16:30 ・内容ーボタン付けと縫い物としてリボンシュシュ製作指導 ・参加者ー中学1年～高校3年 7名 ・当日講師ー東京実行委員2名、短大生2名、他2名 計6名



すくすくスクールでの巾着袋製作

4 以上の成果

どの回においても参加者は、一生懸命製作をし、ものづくりの楽しさと丁寧な指導に満足していた。家庭科を学習していない小学4年生以下でも興味・関心・意欲があれば、製作できるとの実感を得た。

II 会員相互の学習交流会の開催

・日時：2016年1月31日（日）13:30～16:15・場所：女子栄養大学 駒込校舎3号館4階3402教室・話題提供者

①沼口博先生（大東文化大学教授）

「ドイツの第三段階教育における労働市場対応型職業教育・訓練制度の整備—ドイツの訪問調査を通して—」

② 浅井 直美先生（東京都江戸川区立南葛西第二中学校）

「江戸川区立南葛西第二中学校での学びあい学習について」

・その後ラウンドテーブル：・参加者—東京実行委員 6名
会員3名 計9名。・成果—少人数であったので、話し合いが充実し深い交流ができた。今後の活動への期待も話された。

B 課題：これらの成果を今後どのように「生活やものづくりの学びネットワーク」の活動目的に組み込んで地域の方にアピールしていくかである。 愛国学園短期大学 亀井佑子

8. 山梨県の活動報告

山梨県の活動として、2015年6月8日に大学教員6名、小学校、中学校教員各1名、計8名が参加し、山梨県家庭科研究会（略称ヤマカケ）との共催で、山梨大学において交流研究会を実施しました。

初めに、山梨大学の岡松恵先生より、ミニレクチャーとして、「和服（小袖）」について、お話をいただきました。現行学習指導要領において、中学校技術・家庭の家庭分野において、伝統と文化に関連する内容として、和服の文化やたたみ方、浴衣の着方や地域に伝わる織物の例等が取り扱われているようになったことから、伝統的な衣文化について、知識を深め、その指導方法等を探ることを目的としました。現在の和服のもとになっている袖口の小さい衣服を小袖と言い、時代や暮らしに応じて変化していき、江戸時代に身分や男女を問わず広く着用されるようになったこと、文芸意匠として、古典文学や能楽、歌舞伎との関係が深いこと等々、写真や実物を多数紹介していただきながら、わかりやすく、ご教授下さいました。参加者からは、伝統的な生活文化に関する指導が求められている現在、歴史や文学等々と関連させることにより、生徒の興味・関心を引きつけることもできるのではないか等々、意見が出されました。しかし、時間が充分では無かったことから、次回以降も研究内容として取り上げていくことが検討されました。

次いで、山梨大学教育人間科学部附属中学校の山本裕子先生より、中学1年生の住生活分野での授業提案をいただきました。「共に住まう」という題材のもと、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業提案がなされ、参加者で協議が行われました。家族みなで快適な暮らしができるようにするにはどうしたらよいか、いくつかの事例で検討しながら、最終的には自分なら、自分の家族なら、どうするのかと、考えを深めていく内容となっています。

最後に、フリートークとして、小・中学校や大学が抱えている課題、家庭科教育の課題等を話し合い、交流研究会を閉じました。来年度は年に2回以上の交流研究会の実施を計画しており、山梨県内に広く参加者を募っていきたくと考えております。 志村結美（山梨大学大学院）

9. 長野県の活動報告

■学習交流会概要

平成27年11月14日（土曜日）10：20—13：00 信州大学教育学部しなのき会館1F研修室にて行った。「被服整理における科学的な理解を深める指導力—市販洗剤の種類と特徴の把握—」と題して福田典子が講演した。前半では、教科書や資料集に取り上げられる洗剤の記述例や洗剤および洗濯機の開発動向を紹介し、後半では、市販洗剤の成分調べ（ミニ実習）、市販洗剤のpH測定（ミニ実験）を行った。

■参加者の感想（抜粋）

過去に学んだことを引きずっていたり、新たなことがわかっていなかったことに気づかされました。生徒の生活実態に合わせた教材の提示、学ばせ方が必要と思いました。手入れのところは時間削減のため丁寧に実験等を加えておりませんが、効果的な実験を組み入れたいと感じました。「なるほど、そうだったのか」ということばかりでした。学校で生徒と一緒にやってみようと思う内容でしたし、洗剤の選択をするときに成分表示を見て購入したいと思いました。洗剤は親が選んでくれるから、自分には関係ないと思っている生徒やCMや香りで選んでいる生徒が多いかもしれません。でもだからこそ、知識をつけて家族にも働きかけられるような生徒になって欲しいと思いました。これだけ様々な分野の洗剤を同時に比べたことは初めてでしたので、参考になりました。pHは実際に測定してみるとはっきりわかるので、授業等で取り入れると生徒の理解が深まるのではないかと思います。市場には沢山の洗剤があるので、何を選ぶかの観点を持つことは大切ですね。そのポイントを今日は教えていただきました。

■成果と課題等

他の行事と重なり参加者は4名と少なかったが、参加者（会員・非会員）・講師と相互に指導方法等の意見交換をすることができた。少人数対面・実物提示と極めて非効率的ではあったが、人間同士の温かさを感じる距離でのコミュニケーションの重要性を実感できた。ICTなどの効率的な手法と対面・実物教材を組み合わせるに教育効果を高めていけばよいのかを今後も模索していきたい。開催にあたり補助金をいただいたことに心より感謝申し上げる。次年度も、家庭科やものづくりの教育的意義や社会的役割を共有・発信できるような学習交流会を企画したい。 福田典子（長野県）

10. 岐阜県の活動報告

27年度までの活動は、主に2つの学習活動を行った。

1. 高齢者施設におけるものづくり交流会

毎月1回高齢者施設において、ものづくりを楽しむ会を企画、実践した。製作は4月花雑巾、5月桜の巾着財布、6月小布の桃の巾着袋、7月ほおづき巾着袋、8月鳥型巾着袋、など季節の巾着袋を製作。高齢85歳～98歳の皆様6名が常時参加。明治期の「おさいくもの」に記載されるような小物づくりを楽しむ。最後に気に入った巾着袋をタペストリーにし、お正月に各自の部屋に飾った。目の見えない方や指の動かない方、片手の方も、ものづくりを各自で工夫して創作

品を楽しんだ。学生も、高齢者の皆さんから針仕事に関し、教えられることが多い学習会であった。(活動：毎月1回第4水曜日14時～・参加者：会員と学生2名、高齢者6名)

2. 高齢者衣服に関する授業実践

ユニバーサルファッションに関する教材開発と授業実践を所属会員の中学校の協力を得て授業実践を6回行った。打ち合わせ9月8日、授業実践10月～11月6回授業(活動：教材開発と授業実践6回・参加者：会員2名と学生2名)

3. 次年度の課題

平成27年度は、研究交流会を実施し会員を募ることが日程的にできなかった。現在岐阜県で常時活動する会員は、中学校教員と大学教員の2名と学生3名である。平成28年度には、岐阜県の会員を募ることを目的に学習交流会を開催する予定である。

夫馬佳代子(岐阜大学)



岐阜ものづくり研究会の活動の紹介

高齢者施設デーサービスに通う皆さんと手芸のものづくりの会を月に1回実施。活動内容は、手芸を楽しむことを第1に、手指のリハビリやモノづくりの自由な発想を楽しみ作品発表を行った。(岐阜研究会会員と学生他毎月6名85歳～98歳の皆様参加)

1.1. 近畿地区合同交流会報告

日本家庭科教育学会近畿地区に配置されている滋賀県、京都府、奈良県、大阪府、兵庫県、和歌山県で合同の学習会を開催した。本年度は「和菓子」をテーマとし、各地に伝わる和菓子を持ち寄り、それぞれの和菓子の特徴や歴史、伝承の背景等を学ぶことを通して、家庭科で生活(食)文化を取り上げる意義について話し合った。

2015年12月19日(土)に京都教育大学の調理実習室で開催した。会員の勧誘を兼ねて「日本茶」をテーマとした日本家庭科教育学会近畿地区会の学習会に引き続いて開催した。パンフレットを作成し、会員や学会員に周知した。参加者は、19名であった。地区代表者は実物投影機と大型モニターを使って、各地の和菓子の説明を行い、参加者はそれを聞きながら試食した。以下に、学習会において解説された各地域の和菓子の説明を簡単に記す。

和歌山：総本家駿河屋は京都伏見で寛正2(1461)年に創業、紀州藩の初代藩主徳川頼宣とともに和歌山入りし、老舗として親しまれてきた。「練羊羹」は、万治元(1658)年に製法を確立した元祖といわれる。

兵庫：兵庫県はどちらかといえば洋菓子文化圏で名物といえる和菓子は少ない。その中で、赤穂市の「塩味饅頭」は徳川時代から続く伝統ある和菓子である。こしあんに赤穂の名産品である塩の風味が加えられている点に特徴がある。

奈良：大和郡山市の「御城之口餅」である。郡山城(現在は城跡)は、豊臣秀吉の弟・秀長が本格的に築城した。秀長が秀吉をもてなす茶会に珍菓を作らせた。粒餡を餅で包み、きな粉をまぶした一口サイズの餅菓子。店が御城の入口にあることからこの名前になった。

大阪：大阪市の平野区にある「福本商店」で販売されている「亀乃饅頭」は、融通念仏の総本山である大念仏寺に由来する。生地には、蜂蜜と上白糖を入れて、中の白餡にはザラメ糖が用いられている。モチっとした食感と上品な甘さの白餡が特徴の和菓子である。

滋賀：かつて、東海道、中山道、北国街道を始め多くの街道が存在した。そのため旅人のための餅やだんごが多く残っている。その中で、宿場町であった草津の「うばが餅」と京の都への玄関口であった追分の「走り井餅」を紹介した。

京都：茶道で使われる主菓子と干菓子を紹介した。どちらも季節感を大切にし、美しさと味の両方を楽しむ和菓子である。高価な老舗の菓子は贈答品に使われるが、安価で美味しい菓子店もあり、お店を見つける楽しみも紹介した。

永田智子(兵庫教育大学)



◆世話人からのお知らせ

①2016年度の会費の請求を宛名用紙の裏面に記載しております。皆様の会費で会の運営をさせて頂いておりますので、お忘れ無く納入して頂きますよう、お願い致します。

②入会方法(お知り合いの方々をお誘いください)
「生活やものづくりの学びネットワーク」のHPから、リーフレットと入会申込書のダウンロードが可能です。

③各会員の所属県はニュースレターの送付先の県となっております。どなたでも所属県以外の活動にも参加できますが、主な活動場所として所属県以外の県をご希望の方は、連絡用メールアドレスまでお申し出ください。希望する活動県の代表の方に連絡先をお伝えします。

④ニュースレター以外では、メーリングリストによって会員同士の情報交換を行っております。なるべく多くの会員の皆様のこのメーリングリストに登録させて頂き、活発な活動を支援したいと考えています。未登録の方、登録するメールアドレスをお知らせください。なお、異動の少ない個人登録のメールアドレスをお知らせ頂ければ幸いです。

⑤ニュースレター送付先は変更の少ない自宅等の住所を指定して頂きたく願ひ申し上げます。送付先住所が変更になった場合は速やかに連絡用メールアドレスまでご連絡ください。

連絡用メールアドレス: seiktsu_nt@yahoo.co.jp

生活やものづくりの学びネットワーク 第7回 講演会・総会のお知らせ

日時：2016年9月25日(日) 13:30~15:20

時程：講演 13:30~14:30

総会 14:40~15:20

場所：東京家政大学 16号館2階 162B 講義室

東京都板橋区加賀 1-18-1 (最寄り駅：JR 埼京線十条駅、都営三田線新板橋駅)

<講演>

演題：「実物、実感、認識

ーメディア／教育とジェンダーの研究を踏まえて」

講師：村松泰子 氏

◆趣旨

ともに人々の認識枠組の形成を通じて現実の社会のあり方に大きく関与するメディアおよび教育について、ジェンダー視点からの研究をしてきた立場から、メディアや教育と、現実、実物、生活者などとの関係を考えることを通じて、「生活やものづくりの学び」への期待を述べてみたい。

◆プロフィール

1967年東京大学文学部社会学科卒業。同年より1991年までNHK放送文化研究所に勤務。この間、上智大学文学研究科博士後期課程単位取得退学。1991年より東京学芸大学で教授、理事・副学長、学長を務め、2014年退職。同年より公益財団法人日本女性学習財団理事長。

《東京家政大学キャンパスマップ》



生活やものづくりの学びネットワーク

事務局

〒112-0012 東京都文京区大塚4-39-11 仲町YTビル3F 日本家庭科教育学会事務局気付

メールアドレス：seikatsu_nt@yahoo.co.jp FAX：03-3902-1668

ホームページ：http://www.geocities.jp/seikatsu_monozukuri_nt/